



知の歴史を積み重ねるヨーロッパの博物館（ベルリン）の標本庫内部。ここにも多くの「〇〇の中の〇〇」が所蔵されている。分類学者の渡邊俊さん（日本大学）は、日本の施設との違いに圧倒されたという。今、目の前を泳いでいる魚も、百年先、二百年先の科学にとっては貴重な標本となるのである。



第13回

⑬ 男の中の男？

私の知り合いに「男の中の男」を自認するものがある。意味がわからないので詳しく聞いてみたが、やっぱりよくわからなかった。しかし、生き物には「〇〇の中の〇〇」と呼ぶべきものがある。例えば、魚屋でよく見かける「しよっこ」。いわゆるブリの子供だが、「ブリの中のブリ」はオランダ・ライデンの自然史博物館にいる。私の知人のように「自称」でも、意味不明でもなく、世界中の科学者が認める真正正銘「ブリの中のブリ」である。

学名には基準となる1個体の標本が

なんのことやらと思われるかもしれないが、この理由は現在の分類学上のルールにある。パプアニューギニア山中の先住民が、そこに生息する138種の鳥のうち1種を除き、すべてを正確に区別していたことからわかるように、人間は目に入るものを自然と区別する。こうして有史以来、ヨーロッパを中心に地球上の生物は「分類」され続けてきた。しかし、バラバラの「分類」は非常に扱いにくい。そこで百年近い議論の末、ようやく1961年になって「国際動物命名規約」なる決まり事ができた。細かいことは抜きにして、重要なのは1700年代中ごろから広く用いられてきた方法に従って動物に名前（学名）を付けること。その際、名前の基準となる1個体を指定し、体の大きさや形など詳細な特徴を公表した上で、将来にわたってその標本が保存されるようにすることである。つまり、動物の名前（学名）にはすべて、その基準となる1個体の標本が存在するのである。これこそ、まさに「〇〇の中の〇〇」であらう。

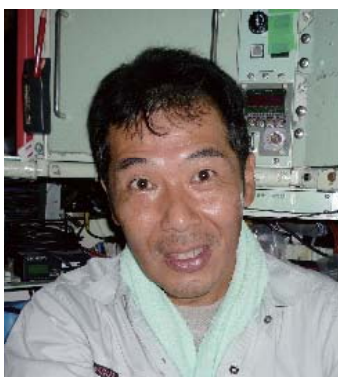
幕末期にオランダで命名

ブリに最初の学名が付けられたのは1854年。当時、ライデンの博物館館長だったテミンクと脊椎動物研究者

のシュレーゲルによる。二人は有名なシーボルトらが長崎・出島から送り続けた様々な標本に基づき、幕末の混乱くすぶり始めた日本から遠く離れたオランダで、ヨーロッパにはない魚に次々と名前を付けていった。日本ではとくに知られていなかったブリに初めて名前をつけたというのはおかしな話だが、当時、科学の中心だったヨーロッパへ最初に報告したという意味だから仕方がない。魚だけでなく、ほ乳類や鳥類、植物など多くの日本の生き物がシーボルトらを通じてヨーロッパへ知られることとなった。

「〇〇の中の〇〇」は存在する

「国際動物命名規約」に従えば、江戸時代の長崎で採集され、テミンクとシュレーゲルにより新たな学名とともに報告された1匹のブリこそが「ブリの中のブリ」となる。残念ながらこの標本は紛失しているが、シーボルトに付き従った日本画家・川原慶賀の手による緻密なスケッチを見ることが出来る。また、後生の研究者によって、1947年に代わりの「ブリの中のブリ（干物のようだが・・・）」が指定され、今もオランダ・ライデンの博物館に存在している。ちなみに、同様の理由により、マジの中のマジ、マイワシの中のマイワシ、ヒラメの中のヒラメなど多く魚たちが同じ博物館に保管されている。男の中の男はいざ知らず、生物には「〇〇の中の〇〇」が間違いなく存在する。



あおやま じゆん
青山 潤

1967年神奈川県生まれ。専門は魚類の生態学。研究の傍らエッセーも執筆。「アフリカによるり旅」（講談社）で第23回講談社エッセイ賞受賞。他に「うなドン」「によるり旅・ザ・ファイナル」（いずれも講談社）などがある。